

アメリカ東海岸におけるギュレン運動の展開 —先行研究の批判的検討とアメリカ東海岸の調査から—

志賀 恭子

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程

要旨

ギュレン運動は、1970年代よりトルコでイスラーム解釈者フェトフッラー・ギュレンを筆頭に発祥した奉仕活動（ヒズメト）であり、ヒズメト運動とも呼ばれている。筆者はアメリカにおけるトルコ移民社会に着目し、2013年から2016年にかけて現地調査を行ってきた。ニューヨークのほか、ニュージャージー、ボストン、ワシントン D.C.、トルコにおいて、計9回の聞き取り調査や参与観察を行った結果、ギュレン運動の勢力がアメリカ東海岸で増していることが明らかになった。本論では、これまで蓄積された研究のなかでギュレン運動がどのように語られてきたのかを再検討し、アメリカ東海岸におけるギュレンの理念に賛同する人びと（ギュレニスト）及びギュレン運動の実態と比較考察を行う。これにより、ギュレン運動に関する新たな研究視座を見出すことを最終的な目的とする。

キーワード

ギュレン運動、アメリカ、移民、グローバリゼーション、ネットワーク

Expansion of the Gülen Movement in the East Coast of the U.S.: Critical Discussion and the Result of Examination of New York

Kyoko Shiga

Doctoral Student

Graduate School of Global Studies, Doshisha University

Abstract:

This study focuses on the Hizmet Movement, also known as the Gülen Movement, founded by Fethullah Gülen in Turkey. I attempt to examine how the Gülen Movement develops through the Turkish immigrant community in New York. Onsite research was conducted in New York Metropolitan Area, Boston and Washington D.C. from 2013 through 2016. As a result of interviews with Turkish immigrants and participant observation, this article argues that the Gülen Movement has been a big influence among the community and it has been expanding. In this paper, first I will look at previous studies on the Gülen Movement and discuss the different opinions on this network. Then, I compare the previous studies with my research to clarify the situation of the Gülen network in the east coast of the U.S. The aim of this study is to provide a new perspective on the global Gülen Movement.

Keywords:

The Gülen Movement, the U.S., immigrants, globalization, network

1. はじめに

ギュレン運動は、1970年代よりトルコ出身のイスラーム解釈者フェトフッラー・ギュレン(Fethullah Gülen)を筆頭に発祥した。この運動は、ギュレンの理念に賛同する人々（以下、ギュレニスト）の間ではヒズメト運動と呼ばれている。彼らは、奉仕の意味をもつヒズメトの理念の下、1990年代以降より教育機関や非営利団体を設立しながら活発にグローバル化している。ギュレンは、1990年にアメリカ合衆国に移住して以来、そこで自身の活動を行っている。本稿は、ニューヨークを中心としたアメリカ東海岸の移民社会において展開されてきたギュレン運動に着目し、先行研究では見えてこなかったギュレン運動の特徴を明らかにすることを目的とする。そのために、以下ではまず、この運動の概観を押さえた上で、これまでギュレン運動に関する研究がどのように語られてきたのかを再検討する。次に、筆者がアメリカ東海岸で行った調査からギュレン運動の実態を整理して、先行研究と比較考察する。筆者は2013年から2016年にかけて、(5つの行政区からなるニューヨーク市、ロングアイランドとニュージャージー州を含む)ニューヨーク都市圏、ボストン、ワシントンD.C.とトルコにおいて聞き取り調査と参与観察を行った。調査を行うなかで、ギュレン運動の勢力はアメリカ東海岸で増していることが明らかになった。本稿は先行研究と現地調査の結果を照合しながら、アメリカ東海岸でギュレン運動がどのように展開しているのかを考察する。

2. ギュレン運動とは何か

ギュレン運動とは、ギュレンの思想に影響を受けた人々が行っている活動である。ギュレン運動とは他称であり、近年のギュレンやこの運動に関する学術研究も、ギュレン運動と呼ぶことが多い。ただし、この運動に携わる人たちはこの名称をやや蔑んだ呼び方と捉え、不快感を示すことがある¹。自称は、「ヒズメト運動(Hizmet Hareketi; Hizmet Movement)」である²。しかし、「ヒズメト(Hizmet)」は、ギュレンの思想に賛同していなくとも、奉仕、すなわち英語でいうボランティアにあたる意味を指すトルコ語で、一般的に使われる言葉である。本稿は、トルコ人の日常語であるヒズメト（奉仕）という語彙と区別するために、この運動を敢えてギュレン運動と呼ぶことにする。また、ギュレンの思想を信奉し運動に携わる人々をギュレニストと呼ぶ。これらは、決して蔑視的表現ではないことを断っておきたい。

では、フェトフッラー・ギュレンという人物について把握しておく。彼は、ギュレン運動の指導者で、ギュレニストたちから「権威ある主流派トルコ人ムスリム

学者、オピニオンリーダー、教育活動家」と位置づけられている³。彼らはギュレンのことを、トルコ語で先生を表すホジャと、親近感を示すエフェンディを付けて「ホジャフェンディ(Hodjaefendi)」と呼ぶことが多い。

ギュレンの生い立ちについて触れる⁴。彼は、出生届けでは1941年生まれとなっているが、学術書によって1938年生まれともなっている。それは、誕生から経過して出生届けが提出され、正確な誕生日が不明なためである。父親は、トルコ国家によって認可されたイマーム（礼拝導師）として活動していた。母親は、トルコで政教分離が厳しく適用されるなか⁵、イスラームに基づく学びの重要性を認識し、村で少女たちにクルアーンを教えていた。ギュレンは、父親からアラビア語を学び、母親からクルアーンを教わった。1951年（彼がおよそ10歳の時）、ハーフィズ（クルアーン暗誦者の称号）となった。

1957年、ギュレンは、「ヌルジュ運動(Nurculuk)」の創始者サイド・ヌルシ(Said Nursi)(1873-1960)が執筆した『光明の書(Risale-Nur Külliyyatı; The epistles of lights)』というクルアーンの解釈書と出会った。ヌルジュ運動とは、イスラーム信仰を、信仰告白に重きを置いた従来の共同社会の形から、世俗社会に適応させた草の根的な信仰共同社会としてのジェマートに変容させた⁶。ヌルジュ運動が他のイスラーム運動と異なるのは、イスラームについての理解と、個人の意識を高めて社会を変えていく方法である⁷。ヌルジュ運動の信仰指針だったこの本が、ギュレンの人生に影響を与えたとされる。

ヌルシは、1925～50年にシェイフ・サイードの乱に関与したという理由や、「世俗主義(ライクリッキ、Laiklik)」に反したという理由で逮捕された。『光明の書』は、彼が獄中で執筆した著作である。ヌルシは、教育と科学の融合や、教育の重要性を説いていた。ヌルジュ運動は、1950年代に信者数を拡大させトルコ最大のイスラーム運動となったが、ヌルシの死後、幾つかに分裂した。このヌルジュ運動をクルアーンの原典に基づくものとギュレンはみなし、ヌルシの主張を彼の思想の礎とした。たとえば、ギュレン運動の「光の家(ışık evler; lighthouses)」は、ヌルジュ運動の読書勉強会「デルシャネ(dershane)」から発想を得ている。

1959年、彼は宗務庁から国家認定のイマームの資格を得て、イズミルに赴任した。彼は、以後、モスクだけでなく、コーヒーハウスなどでもイスラームについて説教を行うようになった。1960年代より、彼はトルコの間で周知されるようになった。ギュレンの説教を聞いた人々のなかから、彼の思想やイスラーム解釈への賛同者が現れるようになった。統計などのデータがないため確かな数を知ることにはできないが、賛同者数は次第に増加した。そのなかには、都市部の起業家、ビジネスマンや、エリートたちも多く含まれていた。中産階級以上の人々の支持が中軸となって、その後のギュレン運動を成長させる追い風となった⁸。トルコに

において経済的、政治的、社会的自由化が進む 1980 年代より、ギュレン・ジェマート（共同体）は足場を固めていった⁹。1923 年の独立以来、トルコは近代化に向かおうとしていた。しかし、ギュレンを筆頭とするギュレン・ジェマートの考えは、ヨーロッパ化とほぼ同義で解釈された近代化ではなく、イスラーム信仰のオスマン帝国の下で発展してきた歴史があるが故に、イスラームの土壌を残した近代化にするべきだと考えていた。

ここで、ギュレン運動の組織構成の根源を成す「ジェマート(cemaat)」という概念について理解しておきたい。しばしばコミュニティと訳されるジェマートは、イスラームにおいて共同体を指す「ウンマ(umma)」と、スーフィズムの集合体として呼ばれ「ターリカ(tariqa)」とどのように異なるのだろうか。ウンマとは、「イスラーム共同体(umma Islamiya)」とも呼ばれ、時空に関係なくムスリムが共有する統一性である。すなわち、国境や時代に関係なくムスリムであることの一体感である。ターリカとは、「道」を意味する語源を持つ言葉で、スーフィーの流派のことである。スーフィズムでは、信者たちは導師（シャイフ）からスーフィズムの教えを受ける。また、スーフィーたちが修行する道程や修行方法もターリカと呼ぶ。囁目する点は、ターリカは系譜で成立しており、信者たちの間で縦関係が存在する。ギュレンは、1935 年にスーフィズムがトルコで禁止されていることを理由に、世間にギュレニストの集団のことをターリカと呼称されることを嫌がった。代わりに、彼は、中立的で「大勢の人々」や「コミュニティ」の意味をもつアラビア語「ジャマー(jamaah)」に語源をもつジェマートを使った。すなわち、彼は、ギュレンと賛同者の関係は対等なものであるというメッセージを発信している。ギュレンに関する研究において、ギュレン・ジェマートは Local Circle や Gülen Community と英訳されている¹⁰。

次に、ギュレン運動の活動指針について述べる。ギュレンは「寛容」「対話」「イスラームと西洋の相互理解」の重要性を強調している。さらに、ヒズメト運動のヒズメトに由来する実践活動として、喜捨や奉仕活動や弱者支援など、自ら奉仕することが神に仕えることであるとギュレンは説いている。この思想に触発されて、ギュレニストたちは、神に仕えるための活動として、関連団体の運営や教育活動を行っている。換言すると、彼らは労力を提供して、額を問わず寄付をして、他人に奉仕することで神に仕えるとしている¹¹。

奉仕を掲げたギュレン運動の国際化は、1990 年代から活発になる。彼らの幅広い活動のなかで最も重要なグローバル化の手段の一つが、教育活動である。ギュレン運動の教育活動は、1980 年代初頭にトルコで展開され始めた。その数は、1999 年までに、150 以上の私立学校、約 150 の教育機関としてのデルシャネと学生寮が設立されたと言われている。1990 年代以降、彼らは中央アジアやバルカン半島

に進出し、デンマーク、ベルギー、オランダ、ドイツ、イギリスやアイルランドでも教育機関や非営利団体を設立した。それらの学校の運営資金は寄付金に依ることが多い。

ギュレンは、トルコにおいて幾度となくトルコ国家から敵視されてきた。1度目は、1971年ギュレンが秘密教団の指導者として逮捕され、公の場での説法が禁じられた。だが、彼はその後も説教を続け執筆活動を行った。彼の説法を聞くため、国内外から彼に会いにくる人たちがいた¹²。1980年、ギュレンの国家認定のイマームの資格は失効した。1986年、彼は再び刑務所に送られた。獄中にもギュレンやギュレニストたちは活動を続け、トルコ国内外に学校、寄宿舎、塾を増やし、メディア活動を積極的に行った。1999年6月21日、ギュレンは世俗主義の共和国を脅かす危険人物としてテロ対策措置法の下告発された¹³。同年、彼は療養を理由にアメリカ・ペンシルヴェニア州に移住した。

3. 批判的検討

これまで、フェトフッラー・ギュレンとギュレン運動に関しては、運動の発展過程、組織構成、活動内容、教育、グローバル展開などについての研究が進められてきた。まず、ギュレン運動の概観を知る上で、以下の先行研究が挙げられる。ハカン・M・ヤヴズ（1999）は、ギュレンの生い立ち、運動の展開過程、運動の組織体制について調査している。また、ヤヴズと中田考（2000）がギュレン運動をヌルジュ運動から派生した関係として明らかにして以来¹⁴、最近の研究でもその見解が強い。大川玲子（2013）は、ギュレンの思想を宗教学の立場から見ている。大川によれば、彼のクルアーン解釈は、スーフィーの伝統を引き継ぎつつ、現代の問題解決を模索する視座を持つものとし、「伝承による解釈」ではなく「個人見解による解釈」であると言及している¹⁵。幸加木文（2013, 2014）は、ギュレン運動が発展した時期の社会背景であった世俗主義（ライクリッキ）に注目した。彼女の研究は、世俗主義が中心であったトルコにおけるギュレン運動の発展と、従来のギュレン運動に関する研究を問い直している¹⁶。

数多あるギュレン運動に関する研究のなかで注目すべきは、ギュレン・ジェマートのネットワーク性に関する記述が曖昧であり、その論調が研究者によって異なることである。確かに、ギュレン運動の組織構造について明言するには難しさを孕んでいる。ここでは、まずその難点を述べた後、論調の相違について疑問を呈したい。

そこで、ギュレン運動のネットワークがジェマート（コミュニティ）であるという解釈に注目してみる。ヘレン・ローズ・エボウ（2009）は、ギュレン運動に

運動母体となる中央組織がなく、あくまで個人の意志によって活動がなされているという見解をもっている¹⁷。その言及について、幸加木（2014）は次のように述べる。ギュレンистたちは、情報、知識、プロジェクト活動の共有によってネットワークを維持し、ヒズメト活動家としての集団的アイデンティティを生じさせている。そのため、幸加木は、彼らのネットワークを「組織」や「団体」と呼ぶよりも、対等性の意味を持つ共同体（ジェマート）の呼称が適合している点を挙げた¹⁸。

このギュレン・ジェマートは緩やかなネットワークであるとしばしば指摘される。竹内修子（2012）の研究では、ギュレン運動は対話と寛容を強調する穏健な運動で、政治活動とは一線を画しており、組織体としては存在せず、支持者がそれぞれ企業、教育機関、病院を運営しており、企業間の繋がりが少ないことが断言されている¹⁹。竹内は、ギュレン運動参加者同士の「心の繋がり」と、自宅で開催するお茶会という手段によってネットワークが拡大していることから、彼らのネットワークは緩やかだと特徴づけた²⁰。

シンガポールとオーストラリアのギュレン活動を総体的にみようとした阿久津正幸（2013）の研究は、ギュレン運動の社会関係を緩やかなネットワークと結論づけている²¹。この研究における「緩やか」という言葉の直接的定義はないものの、その社会関係の内容は以下の通りである。伝統的方法で宗教的知識を修めたギュレンの価値観に基づき、一般のムスリムたちが、あくまで個人の動機や意志によって自発的に活動の目標や対象を定めている。運動の具体的指示は、ギュレンによるものではなく、会議やインターネットによって連絡が回り情報交換がなされるという。彼らが活動を競い合うように実行することで、彼らの宗教的価値観や信仰が相互に補強され、心の繋がりを強化し、彼らの社会関係が結ばれていく²²。

一体、「緩やか」とはどういう意味なのか。ギュレン運動およびそのジェマートへの参加が会員制でない点が、彼らのネットワークが緩やかであるということなのか。例えば、キリスト教の場合、信者は正式に認可を受けた者を指す場合がある。多くの場合、信徒は教会会員名簿に登録される。しかし、ギュレン運動の参加者はそのような登録制の過程を踏んでいないようである。それが、ギュレン運動の拡大成功の鍵となっているのであろう。この点について、中田考（2000）は次のように述べる。イスラームには、本来、綱領、加入・脱会手続、成員の権利義務の規定、意志決定手続、役職/組織図といったハードな構造を備えた「公式」の組織といったものがそもそも存在しない²³。「聖職者」を媒介としないムスリム信徒個々人のアッラーフへの直接的帰依がイスラームの特徴であるが、イスラーム運動の組織原理もまた同型である²⁴。中田は緩やかなネットワークとは表現し

ていないものの、イスラームの柔構造という表現を用いている。そのイスラームの柔構造を調査する場合、組織の綱領、名簿、帳簿、成員数、イデオロギー、資金源を知る従来の西洋型組織研究では、このような柔構造を調査対象とするには適していないと指摘している。その理由は、カリスマ的指導者の存在とその信奉者の指示ネットワークが重要な役割を果たす場合、組織の正式名称、規約、メンバーシップなどは副次的意味しか持たないからである²⁵。

ギュレン運動は様々な組織・団体・教育機関を持つが、彼らの目的に曖昧性があるがゆえ、この運動の実態や組織構造について調査することは難しいといえるであろう。見原礼子（2017）の研究は、教育学の立場からベルギーにおけるイスラーム学校とギュレン系の学校を比較している。ギュレン系学校は、ギュレンを前面に出そうしないため、学校の理念に賛同するかしないかは個人に依ると、ベルギーのギュレン系学校の校長は述べた²⁶。そのため、見原は、ギュレン系学校とは何かと定義することが難しく、教育学の立場で分析する場合の難しさを述べている²⁷。見原の研究から、ギュレニスト当事者たちのなかには、ギュレン運動をあくまでジェマートの概念、すなわち対等な関係性を強調する心理が窺える。

彼らのネットワークに「緩やか」「曖昧さ」「対等」が前面に出ている研究がある一方で、ハカン・M・ヤヴズ（2003）の研究は、彼らのネットワークにおける上下関係の存在を示唆している。ヤヴズによると、ギュレン・ジェマートは3層から成立しているという。その3つのグループは、①ギュレン運動の活動を率いる中軸メンバー、②ギュレン運動の目的遂行への支援者たち、③ギュレン運動の活動に共感するものの、ギュレン運動の活動家の一員として意識的に活動していない人たちである。第一の中核グループは、ギュレン運動に絶対的な忠誠心を持っており、工学系の学問を専門とする大学卒業者で、ギュレンの親友たちが含まれている。彼らは「大きいお兄さんたち(büyük abiler)」と呼ばれているという。第二のグループは、ギュレン系の財団設立に資金の管財人を引き受けたり、資金調達などで活躍したりしている商人やビジネスマンたちである²⁸。第三のグループは、その中にギュレニストではなく単なるムスリムや無神論者もいるという²⁹。この結果が妥当だとすれば、この運動の司令塔は存在するということであり、ジェマートの対等性に疑問を呈することになる。すなわち、ジェマートの呼称は、コミュニティ内の関係を対等に見せるための戦略とみなす解釈の可能性が存在するということである。

ギュレン運動の越境的戦略性を明らかにしたのは、アイルランドのギュレン運動について研究を行ったジョナサン・レイシー（2009）の研究である。たとえば、海外のギュレン系私立学校設立は、受入れ国のエリートを惹き付け、その学生たちが成長した際に、ギュレン運動とトルコ・イスラームのブランドを拡散させる

ために考案された方法であるという³⁰。さらに、レイシーはイフサン・ユルマズ（2003）の「ギュレンは信奉者たちに、トルコ国家の大使的役割を果たすために移住することを推奨している³¹」という記述を引用し、彼らは移住し地元の交流活動することで、受入れ国にギュレン運動に対する肯定的なイメージを作り上げて礎を築いていると説明する。レイシーは、アイルランドのギュレン系団体について次のように述べている。

ギュレン系団体は、基本的に個人が草の根的に活動するボトムアップ型ではあるが、グローバルに広範囲で行われている運動がアイルランドの活動を援助している。しかしながら、彼らは広範囲の運動からの援助があるにも拘らず、アイルランド在住の移民のみで「トルコアイルランド教育文化協会(the Turkish Irish Educational and Cultural Society, TIECS)」を運営しているふりをしている³²。

TIECS の構造は、アイルランド在住のトルコ移民で構成されるが、ギュレン運動の上層部から周期的に指示がでるといふ。しかし、ギュレンを前面に出さないことが二つの点で鍵のようである。一点目、運動の指導者を出さなければ、地元の人々と繋がりやすく、また単にホスト国の地元で溶け込みたいと考えるトルコ系移民をも巻き込むことができる。二点目、指導者を出さなければ、特定の団体と認識されないのだから、国家資金や組織の合法性が受け取りやすくなるとレイシーは指摘している³³。

さらに、レイシーは、TIECS がアイルランドのエリート（政治家、聖職者、研究者）たちと関係を持つとする背景には、彼らから支援を受けたいという魂胆があると言及している³⁴。また、彼らは異宗教間対話の名の下に他宗教と積極的に交流するも、彼らがイスラームの代表として率先するためにアラブ・イスラームやイスラーム間での交流を図っていない点も、レイシーは挙げている³⁵。レイシーによると、ギュレン運動は、アイルランドを彼らのグローバル化に利用しているという。

以上のように、ギュレン運動に関する先行研究を鑑みると、ギュレン・ジェマート内には対等性があると考えられる研究者と、そうでない研究者がいる。しかし、コミュニティ内の上下関係の存在が明らかになっている限り、その点は看過せずに彼らのネットワーク展開をみていく必要があるであろう。

4. 研究方法

本研究は、アメリカ東海岸のトルコ系移民社会におけるギュレン運動の展開と、トルコ系移民にとってのギュレン運動の意味を探る有益な方法として質的調査を行った。2013年から2016年にかけて、ニューヨークを中心とするアメリカ東海岸在住のトルコ系移民に聞き取り調査と参与観察を行った（調査期間は図1を参照）。

調査対象は、トルコで生まれ、成長期までトルコで育ったトルコ系移民一世を中心にしているが、なかには子どもの頃に移住した者もいる。ニューヨーク都市圏在住の20代から70代の51人（男性21名、女性30名）のトルコ系移民に半構造化インタビューを行った³⁶。インタビューを行うために同意書を得て面会した者と、同意書を得ずに行った者がいる³⁷。また、この中の数名の両親、子ども、親戚とトルコでも非構造化インタビューを行った³⁸。アメリカ東海岸の移民社会におけるこの運動を理解するために、ギュレニスト以外のトルコ人とも面会を行った。現在、ギュレン運動はトルコ本国からテロリスト扱いをされており、多くの運動家が逮捕や拘束されている。このような状況下で、彼らの身の安全を守るため、名前と面会した詳細や日時はできる限り記述するのを控えたい。

聞き取り調査は英語で実施した。面会場所は、対象者の生活をより理解するため、彼らの自宅や職場や活動場所で実施した。また、被面接者の活動に同行し参与観察も行った。殆どの面会時間は、一回につき一時間であるが、なかにはトルコ式朝食や夕食を行いながら二時間以上行ったケースもある。インフォーマントの半数とは、2回以上の面会を行っている。2016年の現地調査では、ギュレン・ジェマートの女子学生寮と活動家の自宅に宿泊して参与観察を行った。

トルコ系移民への接触は次のように行った。第一に、「ピース・アイランド・インスティテュート(Peace Island Institute, PII)」を訪問し、トルコ出身の移民を紹介依頼した。PIIから「トルコ文化センター(Turkish Cultural Center, TCC)」を紹介され、それ以来TCCによる開催行事や女性の集会に参加した。紹介される移民数に限界があると考え、ニューヨーク在住のアメリカ人と日本人によるトルコ系移民の紹介や、トルコ語で書かれている店舗や「トルコ宗務庁(Diyanet İşeri Başkanlığı)」所属のモスク訪問を通して面会依頼をした。また、インタビューを行った家族や友人からもインフォーマントを紹介された。

現地調査を行うにあたり、資料、男女差の点で限界があった。資料に関して、ギュレン系組織には、運営について第三者が閲覧できる議事録や報告書などの第一次資料がなく、直接行うインタビューしか手段がなかった。男女差について、筆者が女性であるため、参与観察をする際に女性の場に案内されることが多く、また筆者自身も女性の場を選んだ。そのため、自ずと女性のインフォーマント数

が多くなった。

図 1. 筆者の現地調査期間

場所	日程期間	出席したイベント
	<2016>	
ニューヨーク都市圏	8月24日-27日、9月1日-4日	
	9月11日-19日	
ボストン	8月27日-31日	
ワシントンD.C.	9月5日-10日	ATA開催講演会とトルコ料理教室
ニューヨーク都市圏	8月11日-17日	ニューヨーク国連本部で開催された異宗教間対話会議、ラマダーン、エブリュクラス
ニューヨーク都市圏	8月5日-12日	PII開催シンポジウム The Perceptions of Syrian Refugee Crisis in Europe & the U.S. エブリュクラス、トルコ料理教室
ニューヨーク都市圏	2月2日-18日	トルコ料理教室、エブリュクラス、トルコ語クラス
	<2015>	
ニューヨーク都市圏	6月19日-22日	TGCC開催ラマダーンイベント
	<2014>	
イスタンブル(トルコ)	2月15日-3月1日	
イスタンブル(トルコ)	8月3日-31日	
コンヤ(トルコ)	9月29日-10月6日	
イズミル(トルコ)	10月6日-9日	
ニューヨーク都市圏	10月19日-26日	結婚式、トルコ文化行事
	<2013>	
ニューヨーク都市圏	10月5日-13日	トルコ料理教室
ワシントンD.C.	10月13日-21日	犠牲祭
ボストン	10月21日-25日	

5. 調査データ

ここでは、筆者の現地調査によって得られた、ニューヨーク近郊でのギュレン運動の展開過程を記す。まず、トルコ系移民の移住様態とその集住地区について触れた後、ギュレン運動の展開を述べる。

当初、トルコ系移民の集住地区は文献などに記載がなかった。しかし、筆者が聞き取り調査を行ううちに、集住地区が特定された。その後、「ニューヨーク市都市計画局(New York City Department of City Planning)」発行の *The Newest New Yorkers*、トルコ文化センターの場所と、トルコ宗務庁管轄のモスクの場所など照合して確認を行い、それらの場所を訪問した。現在、ニューヨークのトルコ系移民の集住地区として挙げられるのは、①シープヘッド・ベイ、②クリフトン／パターソン、③サニーサイド／ウッドサイド、④クリフサイド・パークである(図2参照)。トルコ系移民の住居パターンとして、家族や知人の近所に住むことが多

いように窺える。

図 2. トルコ系移民の集住地区

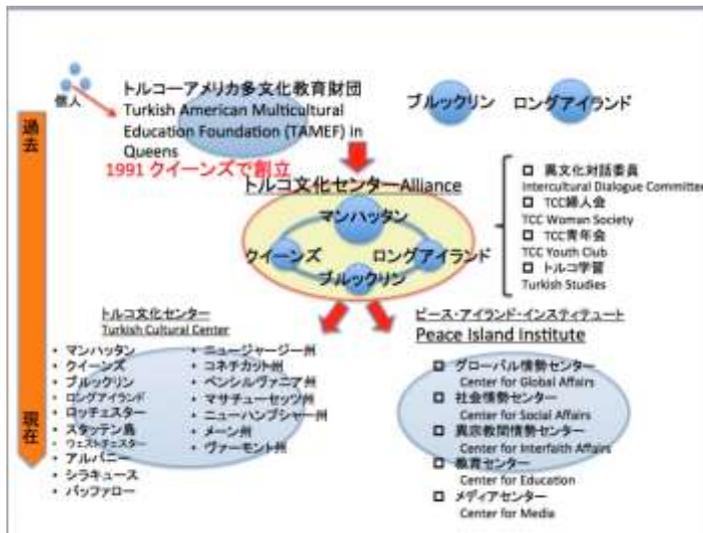


コミュニティ形成の順番

- ① Sheephead Bay
- ② Clifton/ Patterson
- ③ Sunnyside/ Woodside
- ④ Cliffs Park

地図：Google Map を基図として筆者作成。

図 3. ニューヨークにおけるギュレン組織形態の変容



図：筆者作成

次に、昨今のトルコ系移民の移住様態について記す。現在のトルコ系移民の多くは、元留学生や呼び寄せられた家族（友人）などのいわゆるチェーンマイグレーションである。最初の定住者がトルコにいる親戚や友人を呼び寄せ、その子どもたちがトルコから結婚相手を連れてきて家族が増えている。結婚相手の見つけ方として、親族や友人の紹介を通してトルコ人、あるいは留学生を含む在米（短期・長期）滞在者であるトルコ人を配偶者として見つけることが多い。

トルコ系移民の特徴として、彼らはアメリカ移住後もトルコとの結びつきが強く、トルコとアメリカを往来するトランスナショナルな人々が多い。トルコとの結びつきとは、家族間の結びつきのほかに、トルコ本国の政治に関心を持ち続けトルコの政党を根強く支持していることである。そのため、彼らの多くは、アメリカ市民権を取得してもトルコ人としてのアイデンティティが強いといえるであろう。3年間の現地調査において、拡大家族内で政治思想と宗教観が異なる場合があることが窺えた。当初は、異なる政治思想に関係なく、家族内で交流がなされていた様子があった。しかし、2016年の調査で現地に赴くと、トルコ国内で政治や宗教思想による分断が高まるなか、家族の分裂も次第に始まっているように窺えた。

次に記すことは限定的な結果であるが、ニューヨーク在住のギュレニストたちの活動から窺えたことを記す。筆者が滞在中に、熱心なギュレニストたちが活動する場所に、トルコ文化センター、PII、アミティ・スクールがあった³⁹。

一瞥して異なる団体に見えるこれら3団体に、共通点が存在する。それは、ギュレン・ジェマートの男子寮・女子寮に住む語学学校に通う大学準備生、大学生、大学院生たち、独身の若者たちが、これらの団体で奉仕活動をしていることである。

ここで彼らの寮生活について触れておく。本稿は筆者が女性であるため、女子寮の状況しか把握できていないことを断っておく。およそ5・6名の独身女性が一つのアパートに暮らしている。人数はそのアパートの大きさとベッド数による。彼女たちは、トルコや海外出身のギュレン系高校の卒業生が多い⁴⁰。各女子寮では、年長者が「アブラ(abra) (お姉さん)」と呼ばれており、リーダー的役割を果たしている。アブラは、勉強会の進行係、寮のまとめ役、ギュレン・ジェマートからの連絡係を担っている。勉強会とは、ギュレンの執筆本の輪読会である。彼女たちの話によると、それらの暗記大会が開催されるようである。大学院生を除く寮生は、当番制でご飯を作る。居間には、篤信の信者たちの自宅と同様、ギュレンの執筆本が並べられることが多い。

アブラの存在について、そう呼ばれるのは寮内のリーダーたちだけではない。自分たちより年齢が上で、結婚している女性にはさらに敬意を払いながらアブラと呼ぶ。また、アブラたちも年少者を妹のように接する。年少者たちは、アブラの指示に従ってギュレン系団体行事の手伝いをする。この点から、ギュレン・ジェマートは年功序列で、結婚している女性が優位な上下関係が存在することが窺える。男性も同様の構図が存在し、年長者は「アーベイ(ağbey) (お兄さん)」と呼ばれている。

寮生ではない(殆どは結婚している)女性たちは、婦人会、お茶会、「ソフベト

(sohbet)」と呼ばれる勉強会などで集まる。婦人会は、主に TCC の行事の打合せを行う。ソフベトは宗教勉強会の場である。勉強会には、先生と呼ばれる進行係がいるが、彼ら（彼女たち）は、アラビア語を知っているとは限らない。

次に、ニューヨークにおけるギュレン系組織について記す。限定的な団体のみになるが、図 3 のような相関関係が存在する。地元の外部者（トルコ系移民以外）にアプローチや共催活動を行うのは、各地に存在するトルコ文化センターと PII が中心である。そのなかでも、両組織は、マンハッタン 5 番街に事務所を共有している。その位置は、国際連合本部、各国の領事館、コロンビア大学やニューヨーク大学をはじめとする教育機関から近い。学生寮やアミティ・スクールは、ギュレニストたち、ギュレン・ジェマートのビジネスマンなどの寄付によって大きく支えられている⁴¹。図 3 は、ウスル・アヌル（2014）の研究を参考にしながら、筆者の現地調査を基にして作成したニューヨークのギュレン運動の組織相関図である⁴²。PII やトルコ文化センターの運営者たちによると、これらの団体は全てギュレン・ジェマート所属ではないという。彼らの関係は「提携(partnership)」と呼ばれる。これらの団体の運営者に女性はおらず、全て男性が幹部的役割を担っている。

ニューヨークにおけるギュレン系組織は、1991 年から現在にかけて、組織形態が変容している（図 3 参照）。ここからは、関係者の話から現在の相関関係の歴史を紐解く。1990 年代当初、ニューヨーク周辺各地において、TCC の前身非営利団体が独立して活動を行っていた。1991 年、「トルコ—アメリカ多文化教育財団 (Turkish American Multicultural Education Foundation (TAMEF) in Queens)」がクイーンズにて、熱心な信奉家によって設立された。TAMEF は、地元ニューヨークの人々と積極的に交流を行い、運営状態が優れていた。そのため、他の地域の同様のギュレン系団体は TAMEF を模範とした⁴³。その後、各地の同様団体は、「トルコ文化センター同盟 (Turkish Cultural Center Alliance)」を結ぶことを決定した（締結年は不明）。彼らは、マンハッタンの一等地である 5 番街に TCC を構えた。各地のトルコ文化センターの運営者たちは、ここに集まり会議などを行うも、そこは TCC の本部ではないという。

当初の TCC は、「異文化対話委員会 (Intercultural Dialogue Committee)」、「婦人会 (Woman Society)」、「青年会 (Youth Club)」、「トルコ学習 (Turkish Studies)」と 4 本の柱で活動していた。当初の TCC の大行事は、ビル・クリントン、ヒラリー・クリントンや当時のエルドアン首相など、各界の著名人や市の行政の職員を招いて「友好晩餐会 (Friendship Dinner)」を高級ホテルにて開催したことが挙げられる⁴⁴。しかし、TCC の業務規模が拡大したために、TCC から独立させて、シンポジウムといった知的イニシアティブ活動やグローバル情勢を扱う PII が設立されたという。

次に、運動家たちにとってのギュレンの存在を記す。活発な運動家、アメリカや海外のギュレン系非営利団体の幹部たちは、機会あるごとにペンシルヴェニア州にいるギュレンに会いに行く。その場所で勉強会に出席するだけでなく、彼らは人生の節目に彼と会うようである。たとえば、Aは子どもが生まれた際、自分の新生児を見せるためにギュレンを訪問した。留学生としてアメリカに滞在していたBは、アメリカに残るべきか、トルコに帰るべきか悩んでいた際、ギュレンから助言を得るためにペンシルヴェニアを訪問した。そこでBは、ギュレンから妻や子どもを連れて帰国するべきだと助言を受けたため従った。しかし、2016年7月のクーデター未遂事件後、ギュレニストたちはトルコでは逮捕される状態に陥ったため、結局、彼はトルコに帰国したものの、アメリカに戻って来た。彼らにギュレンの魅力について尋ねたところ、ギュレンは命令形で物を言うのではなく、物腰柔らかかに提案しながら助言をしてくれることが良いのだという。

6. 結びにかえて

ギュレン・ネットワークに関するこれまでの先行研究には、ギュレン・ジェマートを肯定的に評価する研究と、そうではない研究があるように思われる。前者は、ギュレン・ジェマートを対等なコミュニティとして肯定的に捉えているように窺える。一方、後者の一人としてヤヴズ（2003）は、ギュレン・ジェマートの中に3層の上下関係（ピラミッド型で言い表すならば、一番上に①ギュレンと中軸メンバー、中間層に②熱心な運動家たち、一番下に③ギュレン・ジェマートの活動に出入りする人たち）の存在を明らかにした。③の人たちは、本研究の場合、政治思想が異なるとしても、相互扶助ネットワークを形成する目的で参加する新来移民と、ギュレニストの親戚たちに当てはまるであろう。レイシー（2009）は、アイルランドにおける運動の展開を彼らのグローバル化の促進手段と見ていた。筆者も、アメリカ東海岸におけるギュレン・ジェマートについては、年功序列、男女の役割分担、社会的地位の影響が窺えたことから階層的な社会であると考えられる。社会的地位の影響とは、ギュレニストと研究者の両者に言えることである。ギュレニストに対しての社会的地位とは、経済的、知的、労力的貢献度によって上下を左右する。研究者について言えば、研究者の地位や性差によって、ギュレン・ジェマートの見え方が異なる可能性が潜んでいるかもしれない。だからこそ、ギュレン運動に関する研究は、研究方法を明らかにする必要があるように思われる。

1990年代より、家族の呼び寄せや元留学生によって、ニューヨークにトルコ系移民が増加傾向にある。ギュレン運動はその傾向に伴い、ニューヨークの移民社

会に入り活発化している。その皮切りとなったのが、TCC の前身団体である TAMEF である。周辺の同様のギュレン系団体は、TAMEF を模範とし軌道に乗せてきた。それが成功すると、トルコ文化センター同盟を結ぶことにより、地元ニューヨークでの活動を安定化させ強固なものに発展させた。その展開過程が興味深い。

これまで、ギュレン運動は主にトルコから発信されてきた市民運動であるとされてきた。だが、ギュレンが住むペンシルヴェニア州の施設は、熱心な運動家にとって聖地のような存在である。この存在や東海岸におけるギュレン運動の展開から、運動の活動中心地はトルコではなくアメリカであるかもしれないという考えが頭によぎる。

これまで、ギュレン・ジェマートは緩やかなネットワークと喩えられてきた。しかし、本調査を振り返ると、この緩やかさは戦略的に作り出されたイメージではないかと考える。その点について今後検討する必要があるだろう。

註

*本稿は、「開発とトランスナショナルな社会運動」研究会において行った筆者のミニ報告「アメリカ東海岸トルコ移民社会における女性の役割—ギュレン運動家を中心に—」（2017年6月18日開催、於東京大学東洋文化研究所）をもとに改訂した。

¹ ニューヨークでの調査中、筆者がその活動を「ギュレン運動」と呼んでいるのを聞いたのは、その活動に関わらない人たちからであった。ギュレニストたちの口から「ヒズメト」と耳にしたが、「ギュレン運動」と呼んでいるのは筆者から口にするまではなかった。さらに、筆者は在日ギュレニストの女性から「ギュレン運動と呼ぶのは間違いであり、蔑視的である」と指摘された。

² 大川玲子『イスラーム化する世界』（平凡社新書、2013）、163。

³ トルコ文化協会『Hizmet Movement 平和を目指すグローバルな社会運動：「ヒズメット運動」と現代イスラーム思想家ギュレン』（日本トルコ文化交流会 nittoKAI、2014）、8。

⁴ 同上、13-27; M. Hakan Yavuz. “The Gülen Movement: The Turkish Puritans” in M. Hakan Yavuz and John L. Esposito, eds., *Turkish Islam and the Secular State: The Gülen Movement* (New York: Syracuse University Press, 2003), 19-47; 幸加木文『（博士論文）現代トルコにおけるフェトフッラー・ギュレンの思想および運動の志向性とその変容』（東京外国語大学、2013）、6-9 など。

⁵ 1923年のトルコ共和国独立以後、トルコはそれまでのイスラーム的慣習（カリフ制の廃止、イスラーム歴から国際的な暦への移行など）から西洋的価値基準のシステムに移行した。特に、1928年、憲法第二条に「トルコ国家の宗教はイスラームである」とい

う条項を削除した。宗教を公の場で表現することは、遅れたこととみなされる風潮になった。

⁶ M. Hakan Yavuz, “Islam in the Public Sphere: The Case of Nur Movement,” in M. Hakan Yavuz and John L. Esposito eds., *Turkish Islam and the Secular State*, 4.

⁷ *Ibid.*

⁸ Erol N Gulay, “The Gülen Phenomenon: A Neo-Sufi Challenge to Turkey’s Rival Elite?,” *Critical Middle Eastern Studies*, Vol. 16, No. 1 (Spring 2007), 39.; Joshua D. Hendrick, “Globalization, Islamic activism, and passive revolution in Turkey: the case of Fethullah Gülen” *Journal of Power*, Vol. 2, No. 3 (December 2009), 345.

M. Hakan Yavuz, *Islamic Political Identity in Turkey* (New York: Oxford University Press, 2003), 184.によると、1980年代にギュレンは、エンジニア、ブルジョア、知識人からの支援を得て、また商人たちに向けて注意深く彼らの役割について語ったという。商人たちの役割とは、地域の力としてトルコを活性化させるということである。

⁹ Gulay, “The Gülen Phenomenon,” 38.

¹⁰ ヤヴズとエスポシトは「ギュレン・コミュニティは、トルコの社会政治の文脈とサイド・ヌルシの考えによって形成されている」と述べている(M. Hakan Yavuz and John L. Esposito, *Turkish Islam*, xxviii)。エボウは、ギュレン運動を「都市部や地方におけるビジネスマン、社会人、労働者による地域サークル」と位置づけている(Helen Rose Ebaugh, *The Gülen Movement: A Sociological Analysis of a Civic Movement Rooted in Moderate Islam. Houston* (New York: Springer. 2010), 47。

¹¹ Margaret Rausch, “Gender and Leadership in the Gülen Movement: Women Followers’ Contribution to East-West Encounters,” paper presented at East and West Encounters: The Gülen Movement, Conference December 5-6, 2009, University of Southern California, Los Angeles. CA., 181.

阿久津正幸「非イスラーム世界における hizmet —ムスリム社会の構築とイスラームの伝統的価値観—」『宗教と社会貢献』3巻1号(2013)、5。

¹² Hendrick, “Globalization, Islamic activism, and passive revolution in Turkey,” 345.

¹³ Gulay, “The Gülen Phenomenon,” 37.

¹⁴ M・ハカン・ヤヴズ「もう一つのトルコ・イスラーム運動 —ヌルジュ運動とフェトブラフ・ギュレン」『現代中東研究』3号(1999)、35-56; 中田考「トルコのイスラーム主義『ヌルジュ』運動—フェトフッラージュを中心に」『中東研究』4月号(2000)、2-11; 同「トルコの『市民社会』思想運動とフェトフッラー・ギュレン」『中東研究』3月号(2001)、19-28。

¹⁵ 大川玲子『イスラーム化する世界』、182。

¹⁶ 幸加木文『(博士論文) 現代トルコにおけるフェトフッラー・ギュレンの思想』; 同「公正発展党との非対称な対立に見るギュレン運動の変動—2010年代トルコの政治情勢の一考察」『中東研究』521号2巻(2014)、80-93。

¹⁷ Ebaugh, *The Gülen Movement: A Sociological Analysis*, 45, 47-48.

¹⁸ 幸加木文「公正発展党との非対称な対立に見るギュレン運動の変動」、85-86。

¹⁹ 竹内修子「ギュレン・ムーブメントに関する一考察—ネットワークの視点から—」『愛

- 知学院大学文学部紀要』第42号(2012)、53。
- ²⁰ 同上、56。
- ²¹ 阿久津、「非イスラーム世界における *hizmet*」、3-5。
- ²² 同上、5。
- ²³ 中田、「トルコのイスラーム主義『ヌルジュ』運動」、2。
- ²⁴ 同上、2。
- ²⁵ 同上。
- ²⁶ 見原礼子「ヒズメット運動の公教育への展開とその特徴—ベルギーの事例から—」『ヨーロッパにおける移民第二世代の学校適応—スーパー・ダイバーシティへの教育人類学的アプローチ』山本須美子編、明石書店、2017年、188。
- ²⁷ 同上、188。
- ²⁸ 見原の研究で明らかにされているのは、ベルギーのギュレン系の学校の場合、設立当初はベルギー在住のトルコ系またはモロッコ系のビジネスマンの寄付金が大半を占めていた。生徒数の増加に伴い、保護者からの寄付によって運営されているとある。同上、185。
- ²⁹ Yavuz, “Islam in the Public Sphere,” 189.
- ³⁰ Jonathan Lacey, “The Gülen Movement in Ireland: Civil Society Engagements of a Turkish Religio-cultural Movement,” *Turkish Studies*, Vol. 10, No. 2 (June 2009), 301.
- ³¹ Ihsan Yılmaz, “Ijtihad and Tajdid by Conduct: The Gülen Movement,” in M. Hakan Yavuz and John L. Esposito eds., *Turkish Islam*, 235; Lacey, “The Gülen Movement in Ireland,” 301.
- ³² Lacey, *Ibid.*, 309-310.
- ³³ *Ibid.*, 304.
- ³⁴ *Ibid.*, 310.
- ³⁵ *Ibid.*
- ³⁶ ここでいう半構造化インタビューとは、予め用意した質問表に沿いながらも対話を重視し個々のライフヒストリーを引き出すことに重点を置いた方法である。
- ³⁷ 研究対象のなかに筆者を警戒する者がいた。その背景として彼らの移住生活と滞在資格が関係しており、時と場合により同意書を求めない。
- ³⁸ 本調査の非構造化インタビューとは、彼らと長時間、あるいは彼らの家でホームステイをしながら対話を重ねた結果、データを得た方法である。
- ³⁹ TCC の主な活動は、トルコ系移民が地元の人々にトルコ文化を紹介することで交流を図ることである。また、ニューヨーク在住のトルコ系移民の児童のためのトルコ語学校やサマーキャンプなども開催している。その児童の親は、ギュレニストでない場合もある。PII は、トルコ人（男性）運営者たちが中心となり、ニューヨーク近郊の大学関係者、政治家、大使などを招き、国際情勢についてのシンポジウムを開催している。また、PII は、異なる宗教的リーダーたちと共に異宗教間対話などを国際連合本部などでも開催している。アミティ・スクールは、いわゆるギュレン系学校である。その生徒は、トルコ系移民の子どもたちと、地元のアメリカ人たちの子どもたちが通っている。
- ⁴⁰ 寮生のほとんどは、トルコ出身の留学生が多い。しかし、なかにはトルコ以外の国出

身の留学生もおり、彼女たちは海外のギュレン系高校の卒業生の場合がある。さらに、筆者が出会った留学生は、父親が彼女の出身国の大使の子どもであった。この点は、ギュレニストたちが大使たちにアプローチする点という上記したレイシーの研究内容と接点があるのかもしれない。

- ⁴¹ インタビューに基づくが、日時の記載は被面接者が特定されるためここでは控えたい。
- ⁴² Işıl Anıl, “Political Opportunity Structures (POS) and Turkish Immigrant Organization in Amsterdam and New York.” In Ayşem Biriz Karaçay and Ayşen Üstübcü, eds., *Migration To And From Turkey: Changing Patterns and Shifting Policies* (Istanbul: The ISIS Press, 2014), 289-358.
- ⁴³ これは、TAMEF 設立に携わった者とトルコ文化センター関係者からの話に基づく。
- ⁴⁴ Turkish Cultural Center, *Taste of the Turkish Hospitality*, 72-73; Turkish Americans, “Hilary Clinton Turkish Americans Dinner” (Posted October 16, 2008) [<https://www.youtube.com/watch?v=COQ4u7N2pnM>] (最終検索日: 2017年9月28日); Hizmet Volunteers, “Turkish PM Erdogan attends the annual Friendship Dinner by TCC” (Posted October 3, 2013) [<https://www.youtube.com/watch?v=FvW5ONUuw88>] (最終検索日: 2017年9月29日)。